滄桑の街・香港から(4)

ハロウィーンと運動会

今井　七重

一年の中で一番過ごしやすいといわれる十月、十一月に入ると、それまでのうだるような暑さは一体どこの国の話だったのだろうかと思うほど、連日秋晴れでさわやかな天気が続きます。東京で、木枯らし一号が吹いたというニュースを聞く時期でさえ、亜熱帯地方の香港では、あいかわらず、半袖で過ごせます。しかし、お店のディスプレイは、すっかり秋・冬の装いで、購買意欲をかきたてます。街中では、早くも半袖から長袖に装いを変えている人もいますが、それはほとんど現地の人か、長年住み慣れた日本人に限られています。冬といっても雪が降るわけではないので、ウールのセーターで充分かと思われる程度ですが、不

思議なもので、現地の人がそれなりにコートを着たり、手袋にブーツといういでたちでいると、「郷にいりては郷に従え」ではありませんが、同じような気分になるそうです。今年初めての冬を経験する私たちは、たぶん東京の経験から薄着になると思われますが、来年は、しっかりコートを着ているかもしれません。

十月に入ると、ハロウィーン関連のものが街のあちこちで売られます。娘たちの学校でも、図工の時間にハロウィーン用のマスクやお菓子を入れるための袋を作ったり、ハロウィーン当日は、休み時間に「Trick or Treat」と言いながら、好きな教室を訪れ、仮装した先生から、お菓子をもらったりしました。住んでいるアパート主催のハロウィーンパーティのお誘いがあったり、同じスクールバスを利用している人たちとの企画もありました。日本にいると、なかなかできないだけに、本格的にハロウィーンを楽しもうと誰もが積極的でした。

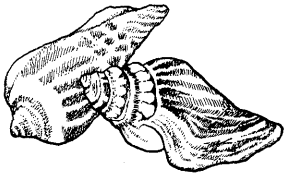
同じスクールバス利用者で主催したものは、事前にお母さんたちが、出席者の確認、訪問する家の選定、その順番、途中の安全確認、付き添いの有無など色々とプランを練りました。最終的に三十名近くが参加し、三グループに分けました。それぞれが思い思いのコスチュームに身をつつみ（手作りももちろん可能ですが、ハロウィーン用の衣裳は街中に安価であふれており、これを利用する人が多いです）、お菓子を入れる袋と、お母さんたちが用意した手作りカード（訪れる家の場所・注意事項・地図・同じグループに属する人の名前が書いてあります）を首からさげて、グループ毎に出発しました。カードの指示に従い、訪れた家では、仮装した家主から工夫を凝らしたお菓子をいただき、カードにサインをしてもらいました。途中の横断歩道では、安全上から、お母さんが数名立ちました。

香港では、横断歩道といっても、信号機が無いところが多く、仮にあっても守っている人はほとんどいません。信号が赤、つまり渡ってはいけないといっていても、平気で渡ります。もちろん、渡ってよしの青でも渡りますから、信号はあってもあまり意味をなさないといえます。周りの流れでつい進んでいて、赤だったということがかなりありますから、しっかり自分で見ていないと危険です。

信号一つをとっても日本と違う事がありますから、細心の注意が必要で、訪れる家もすべて知りあいの家に限られます。下準備から、当日のお世話と大変ではありますが、子どもたちのために異国の地でも一生懸命なお母さんたちの姿は、素敵でした。子どもにも、お菓子がもらえてうれしい、好きな衣裳を着られてうれしい、以上になにか心にのこるものがあると思います。

もう一つの秋のビッグイベントといえば、運動会です。香港日本人学校（娘たちの通う香港日本人学校大埔校の姉妹校）は、各学年六、七クラス、それでなくても狭い運動場で運動会を開催する事は不可能なため、毎年公共の運動場を借りて行っています。とにかく、人数が多すぎて、自分の子どもをカメラに収めるのは、至難の技。そこで、苦肉の策として事前に、学校から「〇〇さんは、障害物競争では、何番目に走ります、等々」のお手紙をもらい、当日は、常に「現在〇年〇組　〇番目が走っています。」との紙が掲示されるそうです。それがなければ、次々に走り続ける体操服姿の生徒の中から自分の子どもを見つける事は不可能というわけです。

一方、去年開校したばかりの香港日本人学校大埔校は、けっして広いとはいえない芝



の校庭ですが、総勢二七〇名のため、十一月二日ここで運動会が開催されました。緑豊かな場所に学校がある反面、交通の便はあまりよくなく、当然学校の駐車場の使用は禁止、近辺も駐車禁止、駐車場もないことから、保護者は、大型バスをチャーターし揃って早朝から駆けつけました。生徒のスクールバス七台が到着してまもなく、各方面からの計十台の大型バスが続々と到着する様相は、壮観でした。

人数が少ないため、各学年平均六種目に参加します。我が家は、一年と三年及び紅白に分かれていましたので、ほとんどどちらかが出場しているという状態でした。普通の学習時に学年の枠を超えた縦割り活動があるため、競技もその特色を生かしているものがかなりありました。リレーは、縦割り班二学年ごとのメンバーで行いました。背の高さで機械的に走る順番を決めるのではなく、子どもたちで、誰が最初に走った方がいいか、誰をアンカーにもってくるかを話し合ったようです。結果、男女混合もありますし、三年生の女の子と四年生の男の子が一緒に走ったりもしました。なかでも圧巻は、紅白にわかれた団体演技です。白組「スイミーものがたり」赤組「まほうの国タイポランド」と名づけられた演技を、一年生から六年生までが一緒に演じました。同学年の生徒を一つにまとめるのではなく、できることにかなりの幅がある一年から六年生をまとめるのですから、先生方の苦労も並大抵ではなかったと思いますが、それぞれの学年がその学年なりにできることを一生懸命やり、それが全体として一つの形をなしていて、すばらしいものでした。通常行われる予行演習もなく、先生たちも紅白に分かれ、演技指導していたため、当日が生徒にとっても先生にとっても、相手チームの演技を初めて見る機会だったというのは、とても興味深いです。生徒たち

は自分の出ていない競技でも真剣に見ていて、応援にも力が入っていたように思いますが、これは普段の縦割り活動で、身近に知っている上級生や下級生がいたのも一因かと思います。

異国での運動会を改めて感じたのは、ラジオ体操の代わりに行われた「香港日本人学校体操」と日本の盆踊り的な「タイポ音頭」でした。中国音楽のゆるやかな調べにのって太極拳の動きをする「香港日本人学校体操」は、香港日本人学校の運動会では必ずとりいれられてきたという伝統の体操です。全校演技の「タイポ音頭」は、鐘の伴奏だけで、はっぴ姿のひとりの先生がカラオケ風にこぶしを聞かせ、みごとに音頭を歌い上げ、日本への郷愁を誘いました。又、香港では、火薬の使用が禁止されているため、耳をつんざくような「バーン」というピストル音ではなく、「電子スターター」というピストルに似たものを使っての静かなスタートが珍しいといえます。これは、ピストルから出たラインがスピーカーボックスにつながっていて、ピストルの引き金を引くと、「バーン」とも「シャーン」とも聞こえる電子音がスピーカーから出て、その瞬間にピストル部分もチカッと光るものです。説明を受けるまでは、何を合図に子どもたちは走っているのかちっとも分からず、不思議なスタートだなあと思っていたのですが、お国柄でした。

日本らしさと香港らしさをミックスした思い出深い運動会も無事終了し、季節は、冬に向かいます。この先どんなことが待っているのでしょうか。期待で一杯です。

（元幼稚園児の母・香港在住）